

社会研究部門

川村俊蔵・河合雅雄

東 滋・鈴木 晃

森 梅代・足澤貞成

研究概要

1) ニホンザルの地域個体群の研究 — 木曾

川 村 俊 蔵

木曾研究林予定地において、3個の大型群と1個の小型群の遊動ならびに群間関係を、とくに秋・冬の2季にわたって観察した。

2) ニホンザルの社会生態学、とくに自然群の環境利用とグルーピング・社会構造

東 滋・足澤貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れがしめす生活と社会現象をとらえなおすために屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行なっている。

3) ニホンザルの個体群の生活の維持に対する森林施業その他のhuman impactの影響の生態学的研究

東 滋

ニホンザル個体群の地域構造や生活のたてかたに与える人為営力の作用を生態学の文脈においてとらえる。もっぱら“自然”の側の反応を、異なる形式あるいは程度で人為の加わった地域間の比較と同一地域の時系列的変化の追跡により把握しようとする。下北半島の北西部・南西部の2つの地域個体群についての個体群変動の追跡と岐阜県下の天然林地域と“森林開発”のすすんだ地域の調査を行なった。

また平行して、おなじ環境変化がニホンザル以外の森林哺乳動物に与える影響についても調査をすすめている。

4) ニホンザルの地域個体群のあり方

鈴 木 晃

房総半島を中心として、ニホンザルの地域個体群の土地利用、個体群動態、遊動におけるスペーシングの問題、オスの群れの離脱等に関する社会関係等の調査およびまとめを行なってきた。

5) アフリカにおける現生ならびに化石霊長類に関する研究

河 合 雅 雄

表記のテーマを文部省科学研究費によって行った。

エチオピアでは化石霊長類調査に関する予察、カメルーン共和国のカンボ地区でマンドリル、エジャガム地区でドリルの予察調査を行い、調査地を決定した。

6) ドリル及びマンドリルの社会生態学的研究

森 梅 代

カメルーン共和国南部カンボ地区で、マンドリルの予備調査を行った。北部のエジャガム地方で、ドリルの遊動状況、食性、音声活動などについての研究を行った。(文部省科学研究費海外調査による研究)

7) スマトラ自然研究計画の準備

川 村 俊 蔵

昭和55年度にはじまるスマトラ自然研究計画の準備を行い、このため3回インドネシアを訪問し、同国研究者(とくにアンダラス大学)、監督官庁と意見を交換、合意に達し、かたわら日本側諸機関との折衝を成功裏に行なった(31頁参照)

総 説

- 1) 河合雅雄(1979): 森林がサルを産んだ。平凡社。

論 文

- 1) 河合雅雄(1979): 道徳秩序の動物学的起源。ライフ・サイエンスの進歩 第6集, 49-61。春秋社。
- 2) 東 滋(1979): 夷木曾山地における森林施業とカモシカの分布。昭和53年度文化庁委託研究「特別天然記念物カモシカに関する調査報告書Ⅱ」。日本自然保護協会。
- 3) Suzuki, A. (1979); The variation and adaptation of social groups of chimpanzees and black and white colobus monkeys. *Primate Ecology and Human Origins* (S. Bernstein and E.O. Smith, ed.), Garland STPM Press, New York.
- 4) 森 梅代(1979) 動物の敬語 — 霊長類の社会的調整行動。言語 vol. 8, No. 6. 24-31 大修館書店。

報告・その他

- 1) 林 進・大竹 勝・東 滋(1979): ニホンカモシカ生息保全地区調査 乗鞍岳地区 三国ヶ岳地区。昭和58年度文化庁委託研究「特別天然記念物カモシカに関する調査報告書Ⅱ」。日本自然保護協会。

- 2) 東 滋・足澤貞成(1980) : 下北半島のニホンザル群の *Population parameters* について。
ニホンザル自然社会の人口的学的研究, 昭和54年度科学研究費報告書, 49-61。
- 8) 田中 晋・東 滋・赤座久明(1980) : 宇奈月ダム環境調査報告 動物調査編, 1-86。
建設省北陸地方建設局。

学 会 発 表

- 1) ヤセザル類の比較社会学的考察 — その2
川 村 俊 蔵
第33回日本人類学会(1979)
- 2) Food Habits and Habitat Utilization of Japanese Black Bears (*Selenarctos thibetanus japonicus* Heude)
Eikichi NOZAKI,
Shigeru AZUMA,
Toshiki AOI, Harumi TORII
Vth International Conference on Bear Biology and Management,
Madison, Wisconsin, U. S.A.
- 3) タナ川に生息する三種の霊長類の遊動とグルーピングと土地利用に関して
鈴木 晃・小金沢正昭
第24回プリマーテス研究会(1980)
- 4) ケニア東部の小森林に生息する霊長類の小集団のグルーピングと社会構造について
鈴木 晃・小金沢正昭
第24回プリマーテス研究会(1980)

変 異 研 究 部 門

野澤 謙・和田一雄
庄武孝義・峰澤 満

研 究 概 要

1) ニホンザルの集団遺伝学的研究

野澤 謙・庄武孝義

ニホンザルの血液蛋白の構造を支配する遺伝子の変異を電気泳動法によって検索し, 群内・群間の変異性を定量化する。現在までにニホンザル約40群, 総個体数約2,000頭の血液試料について, 約30種の蛋白の構造を支配する計32遺伝子座の検索を行なった。このデータをもとにして, 統計的

検討を加え, 繁殖単位間の毎代の移出入率, 遺伝的変異の散布範囲などについて定量的推定を行ない, ニホンザルの繁殖構造を解明すべく作業を続行中である。1979年には第3次集計を行なった。

2) Macaca 属サル

野澤 謙・庄武孝義・川本 芳¹⁾

ニホンザルを含む *Macaca* 属サル各種から採血を行ない, 上記1)と同一の方法によって種内・種間の遺伝的変異性を定量化し, それら種間の遺伝子構成上の差を遺伝距離で表現し, それに数量分類学的手法を適用して枝分れ図を描く。それにより種間の近縁関係, 分化時間の推定等をおこなう作業を目下続行中である。1980年にカンクイザルの詳細な資料を得るべくインドネシアで調査を行なう。

3) ニホンザルの先天的四肢奇形への遺伝的アプローチ

野澤 謙・庄武孝義・峰澤 満

ニホンザルの数多くの餌付群に多発する先天的四肢奇形が遺伝的支配を受けているか否かを明らかにすべく研究が続行されている。集団の奇形出現の家族集積性のデータから統計遺伝学的手法を用いて遺伝率の推定を行なう他, 細胞遺伝学的手法を用いて奇形出現と染色体異常との関連の有無を明らかにする作業を行なっている。さらに交配実験は, 淡路島野猿公園の協力を得て現地で続いているほか, モンキーセンターとの共同研究として, 宮島から入れた奇形ザルを用いて本研究所においても続行している。

4) 家畜化現象と家畜系統史の研究

野澤 謙・庄武孝義

在来諸家畜とそれらの野生原種の遺伝的野外調査によって, 家畜化現象そのものの集団遺伝学的解明と, 個々の家畜種内で地域集団間の遺伝的分化の程度, 系統的相互関係の解明を行ないつつある。

5) ヒヒ類の種分化に関する遺伝学的研究

庄武孝義・野澤 謙

1978年度の調査により, マントヒヒとアヌビスヒヒの雑種化現象について, 前回の資料に追加して詳細な遺伝学的分析を行なった。またエチオピア中央高原に生息するゲダラヒヒの集団動態を遺伝学的に分析し, さらに *Papio* 属と *Theropithecus* 属の遺伝的分化の大きさを定量化しつつある。

1) 大学院生